

心理学における構成概念と科学的モデル

黒木 薫 (Kaoru Kurogi) ・ 岡本 茉麻 (Maasa Okamoto)

三田国際学園高等学校

本発表では、心理学でしばしばその用法が問題視される心理的構成概念について、科学哲学におけるモデル論を媒介に分析する。

構成概念とは、知能や性格など、行動の説明項となるがそれ自体は直接観察できないもの、いわば「心」の代替物として概念的に措定されるものであり、主には心理学的測定の対象となっている。そこでは構成概念が意図した概念をどれほど代表しているのか、客観的に観察可能な行動からいかに正確に測定できるのか、という構成概念の妥当性追求が問題となり、これまで様々に検討されてきた(村山 2012)。中でも Borsboom は、Hacking の介入実在論を引いて構成概念が果たす因果的役割をその妥当性評価として重視する旨の提言をしており、心理学者の手による科学的実在論の応用事例としても興味深い。彼は後に、構成概念を行動項目の原因として解釈しない測定手法、つまり自ら掲げた実在論と競合するモデルを新たに開発するのであるが、その実在論の再構築には取り組まなかった。心理ネットワークアプローチと呼ばれるその新領域は、心理学から構成概念を消去する方法論としてそれ自体が議論を誘引しているようにも見える。

本研究では、Borsboom が検討した構成概念の実在論を起点として、科学哲学における「モデル論」と、モデル的観点を重視した実在論を展開する Potochnik の「因果パターン」という 2 つの道具立てにより、Borsboom 哲学の建て付けを検討し、再構築する。Borsboom がそれぞれ構成概念にあてがった、原因実体としての潜在変数モデルと、創発した総体としての心理ネットワークモデル、この 2 つの解釈の相違が「同じ現象から具現化された異なる因果パターン」として統一的に説明されることを示す。

そして構成概念を検討する上で、構成概念のモデル的側面に焦点を当てることの利点を指摘し、以下のトピックについての考察を提示したい。

- ・ 構成概念を用いる科学的心理学の自律性
- ・ 構成概念の乱立の問題とモデルの目的多様性
- ・ 素朴心理学から抽出される構成概念と、素朴心理学自体のモデル性

- Borsboom, D.(2005) “Measuring the Mind: Conceptual Issues in Contemporary Psychometrics”, *Conceptual Issues in Contemporary Psychometrics*, Cambridge University Pres (仲嶺真監訳、下司忠大・三枝高大・須藤竜之介・武藤拓之訳『心を測る』金子書房)

- Potochnik, A. (2021) Truth and Reality: How to be a scientific realist without believing scientific theories should be true *Scientific Understanding and Representation: Modeling in the Physical Sciences*, Routledge
- Weisberg, M. (2013) "Simulation and Similarity" : *Using Models to Understand the World*, Oxford University Press (松王政浩訳『科学とモデル』名古屋大学出版会)
- 檜原潤,伊藤 正哉 (2022) 「心理ネットワークアプローチがもたらす「臨床革命」—認知行動療法の文脈に基づく展望—」『認知行動療法研究』48(1),pp.35-
- 唐沢かおり・戸田山和久 (2012)『心と社会を科学する』東京大学出版会
- 高橋和孝 (2024) 「理想化されたモデルによる科学的理解はいかにして成立するのか」『Linkage: Studies Applied Philosophy of Science』No.5-2,pp1-8
- 村山航 (2012) 「妥当性概念の歴史的変遷と心理測定学的観点からの考察」『教育心理学年報』No.51,pp118-130
- 渡邊芳之 (1995) 「心理学における構成概念と説明」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』No.2,pp.8a-87